

茨城論壇

9月4日の本紙県西版に、三重県出身の若き戦没詩人、竹内浩三についての記事が掲載された。同研究会の方が、今秋下妻市周辺で軌跡をたどる見学会を開くための下見に来られた。

竹内は、1943(昭和18)年9月、西筑波飛行場(現つくば市)に新たに編成された滑空部隊(グライダー部隊)に転属し、搭乗兵員として挺進第5連隊に所属した。軍隊での生活を克明に記録したのが「筑波日記」であった。「筑波日記」と題された日記は手帳に書かれ2冊が残されている。

44(同19)年1月1日から同年4月28日までは、サブタイトルとして「冬から春へ」

茨城女子短期大名譽教授

小野 孝尚



とある。2冊目の手帳には「みどりの季節」とあり、同年4月29日～7月27日までの記録である。日記の中から抄録しよう。

「2月4日、バスデ下妻へ、マズ行ク。『雨ニモマケズ』ト

イツモノコースドオリ汽車デノ上ニキタス。ソレホドヒマガナイ。シカシ、コノ日記ハオロソカニハスマイ。

リ大キナ支障ガ日ノソットメ下妻ノ町ヲ、ボクハ好キダ。タベモノガドッサリアル。火見櫓ヤ、ポストヤ、停車場

賢治を愛した竹内浩三

云ウ、宮沢賢治ノ伝記ト、高見順ノ『文芸雑誌』ヲ買ウ。前者ニ読ミフケル。頭ヲ刈ッタ。スシヲ喰ッタ。ビフテキ、メ

ココロカラウラヤマシクオモッタ。ボクハ、コノ日記ヲ大本気デナンドモ考エタ。ガタガタノバスヤ、ゴトゴトノ軽

ガ気ニイッタ。コノ町ノ女学校ノ先生ニデモナロウカト、便ガ好キダ。軽便汽車ノ中ノ、ランプヤオ婆サンノ顔ヲ好キ

おの・こつしゅう「茨城女子短期大名譽教授」1944年生まれ。水戸市在住。大正天大学院文学研究科博士課程単位取得満期退学。茨城女子短期大前学長。2017年「茨城の近代詩人群像」、19年「幼児教育・女子教育の先達 豊田英雄とその時代」を茨城新聞社から出版。茨城の文学研究をライフワークとし、豊田英雄の教育理念の次世代への継承と顕彰活動に努めている。

この中で注目するのは、よく食ふことであり、宮沢賢治の愛読者であり、日記の中

には、数カ所賢治の名前がある。中でも賢治の言葉「世界がぜんたい幸福にならないうちには個人の幸福はありえない」が「筑波日記 みどりの季節」の巻頭に置かれている。そしてこの日記を大事にすることである。日記は、記録ではあるが、自己を改めて確認する意味でのアプローチでもある。「下妻ノ町ヲ、ボクハ好キダ。」と書いていることも見逃せない。下妻は、風土的にも住まう人々も文化的な香り高い地域であり、下妻ゆかりの詩人には横瀬夜雨や中山省三郎や上野壯夫等を挙げることができる。食べ物がたくさんあり、停車場があり、女学校があり、書店があり、食堂があり、床屋があり、時計屋がある。筑波山を望める街並みがある。竹内にとって、精神的にも身体的にも満たしてくれるものが下妻にはある。

5月23日には、「赤塚の駅前で、子供が部隊をよこぎったと云って、中隊長は刀を抜いて、子供を追った。本気でやっているのである。その子供の一生の中で、これが一番おそろしかったことになるであろうと思った。」とある。竹内の子どもの思っている心は、仏教でいう四摂法の同事の立場で心をかわらせていよう。

賢治を愛し、良寛に憧れ純朴で純粋な優しい人柄であったことが日記の隅々にかがえる。その後12月1日、戦時編制により滑空歩兵第1連隊となった竹内の部隊は、西筑波飛行場を出発したが、45(同20)年4月9日、フィリピン

バギオ北方1052高地方面の戦闘において戦死。23歳の若さが惜しまれる。